

母性看護学実習における自己評価の分析（第1報）

志賀くに子¹⁾ 伊藤榮子²⁾

ANALYSIS OF STUDENT'S EVALUATION ON CLINICAL PRACTICE OF MATERNITY NURSING (FIRST REPORT)

Kuniko SHIGA Eiko ITOU

要旨：本研究の目的は、母性看護学実習における今後の課題を明らかにすることにあった。その結果を要約すると以下の通りである。

学生は、実習目標から自己目標を明確にすることで自己に応じた学習内容に具体化できる。事前学習の準備ができていた学生は対象に応じた看護を通して「看護」について理解を深め、自己目標への達成度が高い（75%を占める）。自己学習が不足していたと認識していた学生は目標が不明確であり、看護実践に対して積極的に行動できず達成感が低い（22.5%）。

また、学習内容においては、「分娩見学」の体験が母性各期（妊娠、分娩、産褥期）の特徴的变化に対応させ、看護実践に対する満足度を高め、さらに向上目標へ発展させている。

教員や指導者の指導は、学生の自己目標と指導者側の期待度が一致するように、その場面に対応できる実際の指導が達成感を高め、学生の学習意欲につながっている。

キーワード：母性看護学実習、自己評価、学習意欲

Summary : The object of this study was to make clear a problem awaiting solution in the future, on the clinical practice of maternity nursing. The results are summarized to the following;

Students can make their own objective clear by reducing objectives of the training into concrete subjects suitable for themselves. Students who could prepare in advance for the training understood "nursing" through nursing practices, suited to each objective with a degree of achievement of their own objectives of 75%. Students who recognized that they practiced insufficiently, did not make their objectives clear nor could they perform active nursing practices, thus had a lower degree of achievement (22.5%).

Regarding subjects to learn, experience of observing delivery was very significant and yielded high degrees of satisfaction in terms of nursing practice during various maternal periods (i.e., the pregnancy, delivery and lying-in periods), which helped the students set objectives to improve themselves for their own future.

Regarding guidance by teachers and leaders, practical guidance flexibly responding to individual situations, which allowed students' own objectives to meet teachers' expectations, resulted in higher degrees of achievement and encouraged the students' will to learn.

key word : clinical practice of maternity nursing, student's evaluation, volition of learning

I. はじめに

臨床実習は、これまで学んできた知識、技術、態度を統合する場であり、看護を体験的に学ぶ貴重な機会である。なかでも、本学の看護学実習では、女性の一生の中で最も劇的な生命の誕生の瞬間

間に立ち会い、次代の新しい生命をはぐくみ育てる過程に参加できるのが母性看護学実習である。

本学のカリキュラムにおいては、母性看護学実習は3単位、週5日、3週間の実習期間に135時間修得と規定している。この目的は、母性の特徴

を理解し、妊娠・分娩・産褥期及び新生児期における対象に応じた看護ができる能力を養うことであり、目標として、1. 妊娠各期、産褥、新生児の経過に応じた保健指導を学ぶ、2. 妊婦・産婦・褥婦及び新生児に必要な基礎的看護技術を習得する、3. 周産期における母子の看護過程を展開する、4. 母子保健医療チームにおける看護者のあり方を学ぶ、5. 母性各期の身体的・精神的・社会的特徴について学ぶ、をあげている。

今回、私たちは、1期生の母性看護学実習のローテーションの1/2を終了したところで、学生の自己評価を分析することによって、より効果的な実習指導ができるのではないかと考えた。そこで、母性看護学実習に対する学生の自己評価を分析し、実習における今後の課題を明らかにすることを目的に、本研究に取り組んだ。

用語の操作的定義

自己評価：実習評価表とは別に母性看護学実習終了後、実習内容を振り返る目的で学生が記述するために作成した自己評価表で、この内容は、実習目標の達成度、学習内容、実習意欲を含む。

Ⅱ. 研究目的

「母性看護学実習」に対する学生の自己評価を分析し、実習における今後の課題について考察する。

Ⅲ. 研究方法

1. 調査対象：3年課程看護短大 母性看護学実習終了者40名（2～3年次生）
2. 調査期間：平成10年1月19日～6月26日
3. 調査方法：母性看護学実習終了後の学生の自己評価を分析する
 - 1) 分析対象：実習終了後の学生の自己評価表
 - 2) 評価の内容をセンテンス毎に抽出し、カテゴリー化する

Ⅳ. 結果

1. 実習目標の達成度
 - 1) 「全体的な目標が達成できたか」では、「自己目標と関連づけて実習に臨むことで目標全体を意識して実習できた」「自分ひとりの学習だけでなく実習グループのカンファレンスや情報交換、グループ学習をしたことにより、より達成感が高まった」「対象に応じた看護を分娩経過などを通し

て理解できた」「母性看護の対象それぞれの各期においてどのような看護が必要か理解し、実践することができた」などの意見があり、達成度の高い学生は75%である（これは自己評価5段階：5；とても満足している、4；満足している、3；まあまあ満足している、2；あまり満足していない、1；満足していないで、以降、達成度が高いとは5、4をさす〔3を普通と考える〕）。また、「知識が不足」「看護技術が未熟」「積極的に行動できない」「事前学習が不足していたためできなかった」などの理由で達成度が低い学生は22.5%である。（表1）

表1. 全体的な目標が達成できたか

段階	人数 (%)
5	14 (35.0)
4	16 (40.0)
3	6 (15.0)
2	3 (7.5)
1	0 (0.0)
NA	1 (2.5)

2) 「自己の学習目標は達成することができたか」では、「母と子のきずなを感じた」「自分なりに頑張った」「少しずつできるようになった」「今までの実習のなかで一番達成感が得られた」などから、達成度が高い学生は42.5%である。また、「自分のケアでよかったのか」「部分的にしかとらえられなかった」「自信がない」「看護過程にそって行動できなかった」「事前学習が不足していた」「実習の進行の早さに自分の学習がついていかなかった」などの意見をもつ達成度の低い学生は55%である。（表2）

表2. 自己の学習目標が達成できたか

段階	人数 (%)
5	3 (7.5)
4	14 (35.0)
3	13 (32.5)
2	9 (22.5)
1	0 (0.0)
NA	1 (2.5)

2. 学習内容

「学べたことは何か」では、「対象の特徴について」「基礎母性看護技術」「妊婦、産婦、褥婦、

新生児の経日的変化」の順に多く、「看護ケアにおける責任」「出産するという事は自然なことである」「看護目標は具体的に設定する」「事前学習の必要性、大切さ」などの実習態度についてもあげられている。

3. 実習意欲

「意欲をもって実習に臨むことができたか」では、「いつも自分のなかで目標をもってこれを学びたいと思うことで、自然に意欲をもって実習、学習に臨むことができた」「自己学習していたので意欲をもって臨めた」「徐々にできた」「1回きりなので意欲をもって臨むようにした」などの意見があり、半数の学生は達成度が高い。また、「意欲はもったが行動に移せなかった」「意欲をもちたかったが不安も強かった」「事前学習が足りなかった」「何となく1日を過ごした」「褥婦へのケアに積極性がなかった」「疲労が重なってきたら意欲が低下した」「ケース入院中は意欲がもてたが、ケース退院後は意欲をもっても行動が伴わなかった」などの理由で、約半数の学生は実習意欲への達成度は低い。(表3)

表3. 意欲をもって学習に臨むことができたか

段階	人数 (%)
5	4 (10.5)
4	16 (40.0)
3	15 (37.5)
2	4 (10.5)
1	0 (0.0)
NA	1 (2.5)

4. 指導者の関わり

1) 「婦長・臨床指導者・スタッフのコメントはどうか」では、「教え方が丁寧」「厳しかったがみになった」「コメントがよかった」「ケアを積極的にさせてもらった」「技術面で参考になった」などから、指導者の関わりに対し65%の学生が満足度が高い。また、「沐浴の方法が違うといわれ戸惑った」「接する機会がなかった」「もっと助言をもらいたかった」など、30%の学生は満足度が低い。(表4)

表4. 婦長・臨床指導者・スタッフの関わりについて

段階	人数 (%)
5	9 (22.5)
4	17 (42.5)
3	10 (25.0)
2	2 (5.5)
1	0 (0.0)
NA	2 (5.5)

2) 「担当教員の指導はどうか」では、「自分の目的意識を持つ」「自主的に行動する」「積極的に行動できるようになること」などの実習態度について、技術や知識面では「質問責めにあった」「乳房管理が理解できた」「産婦の看護の方法がわかった」などが、また「看護過程でひとりひとり助言がもらえた」「わからないことをただ教えるのではなく、自分で考えたり調べたりして答を見いだせるように導いてくれた」などの意見があり、担当教員の指導の実際(方法)に関して67.5%の学生が高い満足度を示した。(表5)

表5. 担当教員の指導について

段階	人数 (%)
5	9 (22.5)
4	18 (45.0)
3	10 (25.0)
2	1 (2.5)
1	0 (0.0)
NA	2 (5.0)

V. 考察

1. 実習目標の達成度

妊婦の看護において、主に外来実習の妊婦健診では、計測値と妊娠経過に伴う児の成長、妊娠に併発しやすい合併症の有無などの視点から、比較的問題点は把握しやすい。しかし、個人指導としての妊娠36~40週の妊婦の事例の保健指導の実際は困難であり、個々に応じた保健指導は必ずしも容易でない部分が多い。このことが達成感を低くしている要因であると思われる。

外来実習においては、妊婦の体重の増加と胎児の成長、妊娠中毒症(浮腫など)との関係などから問題の把握とその解決方法を学び、レオポルド触診による胎位・胎向はエコーによる判定で、自らの知識と技術の確認ができています。これらは技術の満足度となり、知識・技術の両方から再確認

が得られる。

集団指導は母親学級1回の見学から共通性のある人々が集まり、似たような問題や興味をもって、いるなどから、集団内の話し合いをもつことで、自律性が高まったり、自ら学んだことを自分のものとして実行に結びつけたり、集団グループから友人を得てお互いに問題解決へと発展させ、不安の軽減へとつながっていくなどの利点を学んでいる。

この方法で、学習目標は到達できていると考えるが、妊娠の経過を見ながら分娩の見学、産褥、新生児の看護の実施ができると、学生にとって学習目標は一事例を通して看護するなかで到達可能になるのではないかと考えられる。

2. 学習内容

産婦の看護で達成度の高い理由として、実習学生全員が「分娩見学」を体験したことである。分娩見学は、個の深層の現実に触れ、相互行為の中で分娩第1期から褥婦（新生児を含む）の看護へと有機的に結びつけるための思考プロセスにとっても有意義であると考えられる。産婦の看護を実践しているときに分娩を見学するのが望ましいが、見学できない時は、産褥期の看護の実習の際に見学するようにした。実習の対象となる妊婦が入院していないときは、分娩期の看護に向けての自己学習や模擬妊婦を設定してケアプロセスについて学習を実施している。

実習目標を達成するために、分娩第1期にある産婦を学生2名で受け持ち、分娩第1～4期の看護、また分娩の見学や胎児付属物の観察と計測を実施した。その内容はレオポルド触診による胎位・胎向の確認、陣痛発作と間歇の測定、児心音の聴取、日常生活の援助、分娩進行に伴う苦痛に対する援助としての呼吸法や補助動作の実際について、そして帰室時の援助として全身清拭、足浴、悪露交換、外陰部消毒等である。また、産婦の身体的・心理的变化については観察とアセスメントを記録用紙を用いながら実施した。

分娩第1期にある妊婦が1名しかいない場合、学生3人で受け持つこともあった。入院している妊婦が分娩第1期にあるとは限らないときもあり、継続的な実習ができず、はじめに第4期の看護を実施してから第1期の看護を実施しなければならない場合もあった。今後の課題として、それらを一連の経過として結びつけるような実習方法を検

討する必要がある。

分娩見学レポートを通して全員の学生が、陣痛はあっても自らお産したい、「母子相互作用」「母子のきずな」などの視点から母親になってみたいとの感想があった。さらに、分娩時のVTRによる学内学習では味わうことのできない感動を臨床実習では充分味わい、母となることの自分の存在について考える機会ともなっている。

褥婦の看護では、当初、褥室4日間の中に母親学級見学あるいは未熟児室見学を半日組み込んでいたが、受け持ち期間が短いためIIクール目からは、4日間すべて褥室実習ができるように変更した。

実習内容は、産褥早期の褥婦とその新生児を一人の学生が受け持つこととしている。4日間という短い期間で、しかも経日的変化の著しい褥婦が対象であるため、看護過程の展開にはかなりの努力を必要としている。事前学習に加え実習開始後の褥婦の看護への関連学習が重要であり、実習開始日の月曜日の学内演習や学生間の情報交換やカンファレンスが、この実習方法においては特に有意義であると考えられる。新生児の看護過程は、所定の用紙に沿って展開できず、新生児経過記録用紙を用いてアセスメントしている。母性看護の基礎技術は、その実践の見学をした後に実施しているが、乳房管理の実際に関するその知識、技術面にかかなりの助言を要する。集団指導の見学としては、母親学級、退院指導、調乳指導などを実習全期間を通じて実施し、ここで「集団指導」と「個別指導」の必要性やその利点、欠点、内容等について考える方法が培われると思われる。

新生児の看護では、1度に5人の学生が新生児室実習となるときもあるが、実習内容を時間的に調整することにより問題はない。

実習目標を達成させるために、新生児を1名受け持ち看護過程を展開（基本的な観察事項の実施や基本的な新生児の取り扱いとして、おむつ交換、授乳、沐浴を実施した。また、褥婦への集団指導としての授乳指導や沐浴指導の見学）した。

看護過程の展開についての記録用紙は「看護問題抽出記録」や「看護計画」を用いることとしたが、学生側に時間的なゆとりがなく、褥婦の看護過程を展開するだけで精一杯となり、その記録用紙を使用することができなかった。しかし、「新生児経過記録」用紙を使用して、新生児の経日的変化についてアセスメントをするよう指導し、そ

れは達成可能であった。

基本的な観察事項の実施や基本的な新生児の取り扱い、褥婦への指導場面の見学は、学生個々の実習計画に沿って実施することができた。沐浴はひとりの学生が2～3回実施できたが、この沐浴に関しては、記録をもとに学生自身がフィードバックし、自らの成長をみることができなかった。そこでIIクール目からは、それを解決するために沐浴実施毎の記録用紙を作成し、それをもとに沐浴の回数を重ね、目標や留意点を明確にすることで、達成感やできないことの把握ができ、次の学習につなげることが明らかになったと考えられる。

出生直後の新生児の観察や計測は、見学を主としているが、これは新生児の経日的変化を把握する上で、この見学も学習効果を上げているといえる。

未熟児の看護は、未熟児に対する家族の関わりを含めた未熟児の看護を見学することによって、その実習目標が達成された。見学内容は保育器の作動状況、人工呼吸器などの種々の機器類、経管栄養、光線治療に用いるグリーンライトやブルーライト、未熟児・病児の治療過程、そして看護の実践などである。主に臨床指導者からの説明によりすすめられたが、学生は新生児と未熟児の成熟徴候の違い、新生児室との環境の違い、また未熟児あるいは病児を持つ家族への援助から、特に母児の相互作用の大切さ、それをより発展させるために看護者の援助としてスタッフと家族との交換日記や、カンガルーケアについて関心が高く、学生グループ内でカンファレンスなどのテーマなどに取り上げ、意欲的に学習することが多くみられることから、未熟児看護の見学は必要であるといえる。

3. 実習意欲

1) 実習態度（カンファレンス・反省会含む）のひとつに、学生が母性看護学実習の目標を「自己学習目標」へ転移させ、自らの実習目標を明確にし、それに到達するための具体的実習行動計画の立案ができることがあげられる。意欲的に実習しようとする学生は、この行動計画立案に至るまで学習準備をし、疑問な点や不明なことを追求しようとする態度が旺盛である。

2) 実習記録は学生自らが実習を振り返り、自分の学習不足や学習目標を再確認しながら、目標達

成のために学習する。そしてその成果は記録を通して実感し、次の学習のプランへと結びつけるプロセスとして重要である。この実習期間・実習内容から記録の方法の検討を重ね、実習目標の現状を低下しないように維持しながら、記録のスリム化を図る必要がある。

3) 自己評価からみた実習意欲は、当然ながら実習目標に合わせて「事前学習」の準備をしている学生が意欲的に実習へ臨んでいることが明確になったと思われる。また、部分的学習であっても日々の「行動計画」上の母性基礎技術について学習をし、実習に臨む学生も意欲的であることがわかる。しかし事前学習をしていても、性格的に「発言の少ない」学生はカンファレンスや反省会における満足度が低く、よって意欲的に参加できていないと思われる。

4) 実習場での教員の関わり方は、「記録物」へのコメント・アドバイスは遅くとも翌日に返却することや、看護実践ではマンツーマン指導の場面を多くもつことで、ピグマリオン効果とも考えられるように、学生が教員の期待に応えようとする努力と、学習指導を通じて教員の期待度とそれが一致した時に、学習効果がより大きくなると考える。

VI. 結 論

以上のことから、

1. 母性看護学実習において実習目標の達成度が高い第一の理由は「分娩見学」の体験である。それが母性各期（母子相互作用を含む）を有機的に結びつけ、学習効果を高めている。
 2. 看護実践上での「看護記録（看護過程）」について、学生の思考プロセスを確立するための日々の指導を重点的に行うことは、学生の実習意欲・自己学習意欲に対する大きな影響力となっている。
 3. 看護の後追い記録を最小限にし、看護計画を立案し看護実践の展開ができるために、記録内容の重複を省きスリム化を図ることが重要である。
 4. 学生とほぼ同年代を対象とするこの実習は、「母性とは」を探求し、将来の自分と重ね合わせて夢を持つことができる。
- など、母性看護学実習の課題が明らかになった。

終わりに

臨床実習は看護に必要な知識・技術・態度を習得させ、「看護とは」の探求や学生に望ましい行動を発動させる動因となる。この臨床実習を通して「学生の自己評価」は、学生自身の評価である反面、指導する教員の評価でもある。評価とは指導者（教員及び実習指導者）と学生の相互関係を明らかにし、互いに「次の実習」に活かしていくという永続的なものである。

参考文献

- 1) 安酸史子：経験型の実習教育の提案，看護教育，38（11），医学書院，1997.
- 2) 上野範子・宮中文字編集：母性看護実習指導の手引き，メヂカルフレンド社，1996.
- 3) 宇佐美千恵子・佐藤みつ子・青木康子著：実習指導案作成の実際，看護教育，33（1），44～50，医学書院，1992.
- 4) 大下静香・矢口みどり・大森武子：臨地実習、本当の学習がそこから始まる，看護教育，39（6），435～440，医学書院，1998.
- 5) 齋藤ゆみ：臨地実習の教育的展開から学べるもの，看護教育，37（2），115～120，医学書院，1996.
- 6) 佐々木元禧：到達度評価—その考え方と進め方，明治図書，1979.
- 7) 滝沢恵子：魅力ある実習をするために，看護教育新カリキュラム展開ガイドブックNo.10母性看護学，46～48，医学書院，1996.
- 8) 辰野千寿編：学習指導用語辞典，教育出版，1995.
- 9) 中澤次郎：教育評価—自己評価とフィードバック，医学書院，1994.
- 10) 名古ユウ子・吉田真紀・前田明子：学習意欲を促す要因，看護教育，39（4），298～303，医学書院，1998.
- 11) 藤岡完治：臨地実習教育の授業としての成立，看護教育，37（2），94～101，医学書院，1996.
- 12) 舟島なをみ：看護学実習に関する看護教育学的検討，看護教育，37（2），108～114，医学書院，1996.